近代日本文学研究上の課題と第三項論の意義に関する私論

――その序説――

山中正樹

要旨

近代の日本文学研究においては、伝記研究の成果をもとに作家の思想信条を明らかにし、作品はその表現だと位置づける〈作家論〉が主流であった。その後、三好行雄の〈作品論〉が登場し、近代文学研究の中心的位置を占める。

この三好〈作品論〉を打ち砕いたのが、R・バルトの理論であり、そこから生まれた〈テクスト論〉である。しかし日本における〈テクスト論〉は、バルトの理論の中核であった〈還元不可能な複数性〉の意味を正しく理解せず、バルトが退けた〈容認可能な複数性〉の範疇に留まるものであった。そのため、多数の〈読み（解釈）〉がすべて容認されるという、アナーキーな状況が生まれた。

それに加え、21世紀を迎える前後に巻き起こった「国文学者の自己点検／反省」は、日本の近代文学研究の息の根を止めることとなる。ここにいたって「〈文学〉を研究することも教えることも不毛／不可能である」という考えが蔓延し、研究の主流は〈文化研究〉に移行した。

こうした状況の中で、〈文学（研究）〉の復権を目指すとともに、〈「読むこと」自体を問い直す〉原理論の構築を標榜して提出されたのが、田中実氏の第三項論である。第三項論とは〈主体〉と〈客体〉の二項に加え、〈客体そのもの〉という第三項を立てる「世界観認識」である。〈客体そのもの〉とは私たちの認識の源泉ではあるが、決して私たちの感覚や言語では直接的には捉えられないものである。しかしその第三項を措定することで〈還元不可能な複数性〉を潜り抜け、世界を私たちの手に取り戻すことが可能にな

る。それは私たちの世界〈認識〉の在り様を根本から問い直すものであり、新たなる文学研究の領域を切り拓いたものであるといえよう。

キーワード：実体論・テクスト論・〈容認可能な複数性〉・〈還元不可能な複数性〉・第三項論・認識・世界観・読書行為

一　日本における近代文学研究の課題（一）
―〈作品論〉の誕生まで―

近代の日本文学研究においては、伝記研究の成果をもとに作家の思想信条を明らかにし、作品はその表現だと位置づける〈作家論〉がその主流であった。

そうした状況の乗り越えを図るため、長谷川泉による〈三契機〉説による〈鑑賞〉の提唱などもあったが、あくまでも〈批評〉の域を出ないものであったと言えよう。

その後、小西甚一らによってアメリカからニュー・クリティシズムが導入され、作者を超えて作品を扱おうとする姿勢が登場する。

ニュー・クリティシズムはその主要な所説として、従来の文学研究における「意図に関する誤謬（インテンショナル・ファラシー）」と「感情に関する誤謬（アフェクティブ・ファラシー）」を説く。これは作品を、作者や社会などの一切の外的事象から切り離して、完全に閉じたものとして扱う立場である。また読者の価値観や感情などの解釈も排除し、〈パラドックス〉・〈アイロニー〉・〈テンション〉・〈ジェスチャー〉・〈ストラクチャー〉・〈テクスチャー〉などに注目しながら、文学作品の言語的構造を客観的に分析しようとする。

ニュー・クリティシズムの代表的な論客の一人であるクリアンス・ブルックスは、文学作品を「精巧に作られた壺（The Well Wrought Um）」（Brooks Cleanth, *Keats's Sylvan Historian:History Without Footnotes*, Chales Kaplan and William Dvid Anderson,eds. *Criticism:Major Statements*, 4th ed. New York:Bedford,2000.）に喩える。壺の閉ざされた空間的な秩序や左右対称的な統一性をテクストに当てはめてのことである。

ニュー・クリティシズムは「文学テクストは、たったひとつの言葉を変えることによっても崩れてしまう、パラフレーズ不可能な完璧な言語的秩序を形成し、作者の意図からも読者の感情からも超越し、あるいは他のテクストからも独立し、それだけで自立・自律している閉ざされた空間秩序である、ということ」、「二項対立をなす形式的（音韻的あるいはイメージ的）要素がたがいにからみあって、「パ

ラドックス」や「アイロニー」と呼ばれる有機的統一性――「対立する力の均衡」「多様な衝動の和解」――を形成している、ということ」（丹治愛編『批評理論』講談社選書メチエ二〇〇三年一〇月　p.13）を説いているのだ。

しかしそれは、作品内部の関係性だけを論じたものである。ニュー・クリティシズムは鮮やかに作品を腑分けして見せたが、その先に出るものではなかったため、次第に衰退した。一方その間も、〈作家論〉は依然として、近代日本文学研究の方法的中心を占めていた。

そこに登場したのが、三好行雄の〈作品論〉という概念である。三好は、「作品を一箇の独立した世界として把え、その内的構造を解明することで作品の主題（テーマ）と、そのテーマを必然とした作家の意図（モティーフ）を正確に知悉すること」（「作品論の試み」「国文学　解釈と鑑賞」　一九六一年一一月）を研究の主眼とし、最終的には「文学研究は文学史の体系によって完結する認識の純粋運動」（「作家論の形の批評」『岩波講座　文学6』岩波書店　一九七六年）と規定した。こうして、作品を作家理解の媒介として従属させる〈作家論〉に代わり、〈作品論〉が近代日本文学研究の主流を占めることとなる。

しかし三好作品論は、どこまでも〈作品〉の内部に〈意味〉という実体的構造を措定し、その集積が作家像へと集約され、さらにその全体像を、作家を超えた文学史の流れの中に位置づけようとするものであった。それを打ち崩したのが、西洋から輸入された文学理論、なかんずくR・バルトの批評理論である。

二　日本における近代文学研究の課題（二）
―R・バルトのテクスト論―

バルトは、「作者の死」「作品からテクストへ」等の文芸評論で「作者の死」を宣言し、文学作品における意味創出の主体を〈作者〉から〈読者〉へと転換する。そして従来の〈作品〉に代わって〈テクスト〉という概念を導入した。バルトは、〈テクスト〉について次のように説明している。

テクストとは、一列にならんだ語から成り立ち、唯一のいわば神学的な意味（つまり、「作者＝神」の《メッセージ》ということになろう）を出現させるものではない。テクストとは多次元の空間であって、そこではさまざまなエクリチュールが、結びつき、異議をとなえあい、そのどれもが起源となることはない。テクストとは、無数にある文化の中心からやってきた引用の織物である。（「作者の死」　花輪光訳『物語の構造分析』みすず書房　一九七九年一一月　pp.85-86

以下、バルトの引用はすべて本書による。）

このように〈テクスト〉は、作者が作り出した絶対的な意味の表出の場ではなく、多様な要素の錯綜体であり、読者が「読むこと」を通して意味生成を行なう流動的な場なのである。

一編のテクストは、いくつもの文化からやってくる多元的なエクリチュールによって構成され、これらのエクリチュールは、互いに対話をおこない、他をパロディー化し、異議を唱えあう。しかし、この多元性が収斂する場がある。その場とは、これまで述べてきたように、作者ではなく、読者である。読者とは、あるエクリチュールを構成するあらゆる引用が、一つも失われることなく記入される空間にほかならない。あるテクストの統一性は、テクストの起源ではなく、テクストの宛て先にある。〔中略〕読者の誕生は、「作者」の死によってあがなわなければならない。（「作者の死」pp.88-89）

と、バルトは「作者」を葬り去り、「読者」の誕生を高らかに宣言するのである。テクスト論の立場から、作品の起源としての〈作者〉をバルトは否定する。「作者の死」は「読者の誕生」と同義であり、作品のなかに実体的な意味が存在すると考える実体論的把握を打ち砕いたのである。それは作品の〈意味〉の源泉を作者に求めることを完全に否定するものである。

しかしバルトは、作家を否定したばかりでない。テクストにあって意味創出の主体は私たち読者であるはずだが、その私たち読者の〈読み〉さえも一回性のものとして、意味の源泉や参照項とすることを強く退けるのだ。他者の〈読み〉との比較が不可能であることは言うまでもない。私たちがテクストを読むたびに、常に新しい〈読み〉が出現するのであり、私たちがテクストの意味を参照するためのいかなるものをも否定し、その意味の源泉にはなり得ないのである。そこに示されるのは「還元不可能な複数性」だけである。

「テクスト」は複数的である。ということは、単に「テクスト」がいくつもの意味を持つということではなく、意味の複数性そのものを実現するということである。それは還元不可能な複数性である（ただ単に容認可能（アクセプタブル）な複数性ではない）。「テクスト」は意味の共存ではない。それは通過であり、横断である。したがって「テクスト」は、たとえ自由な解釈であっても解釈に属することはありえず、爆発に、散布に属する。実際、「テクスト」の複数性は、内容の曖昧さに由来するものではなく、「テクスト」を織りなしている記

号表現の、立体画的複数性とも呼べるものに由来するのだ（語源的にテクストとは織物のことである）。（「作品からテクストへ」p.97）

田中実氏は、「バルトは、読書行為が読み手の向こうに現実の実体が隠れていると考える「容認可能な複数性」ではなく、永遠に読み手の中だけの現象「還元不可能な複数性」を明らかにした」（「読むことのモラリティ」（「神奈川大学評論」第五五号　二〇〇六年一一月　p.108）としている。

さらに田中氏は、そのことで「「読み＝解釈」の根拠の絶対性＝「正しさ」」が失われ、日本の文学研究が本質的には「真・偽」という範疇から「〝生きるに価値ある言語〟、すなわち〈文学の言葉〉という研究が拓ける領域を手に入れ」る可能性があったと示唆する。しかし日本の研究状況は、バルトの思想を正しく理解し得ず、田中氏が提起したような〈文学〉研究における新たな地平の開拓はなされなかった。

三　近代日本文学研究の衰亡とその問題点

「テクストは複数的である」とバルトは指摘するが、それはテクストが「いくつもの意味をもつ」という「容認可能な複数性」を言うのではない。どのような起源も、参照項をも許さない、「還元不可能な複数性」なのである。

作品の起源としての作者は否定され、意味を担保しえなくなった。また作品の本文自体も「シニフィアン（意味するもの）」に過ぎない。〈テクスト〉の意味は、読書行為の中で読者の意識に生ずる一回限りの解釈、すなわち「シニフィエ（意味されるもの）」でしかなく、それは他者の解釈とも、読者自身の過去の解釈とも比較検討することが出来ず、〈読み〉は孤立する。

しかし近代日本文学研究では、バルトが峻別した「容認可能な複数性」と「還元不可能な複数性」の区別を曖昧にしたまま、ポストモダンの名の下に、解釈の一義性だけを否定した。その背景には「正解到達主義批判」もあるだろう。ここに、多様で雑多な〈解釈〉が、なんらの根拠ももたないまま、謂わば文字通り「垂れ流される」ように排出される状況が生まれることとなる。どのような〈読み〉も許されると言う「ナンデモアリ」の混乱状況が招聘されたのである。ここに「読みのアナーキー」が現出することになる。

こうした事態の中で、近代日本文学研究は、みずからの研究の基盤としてきた〈作家〉も〈作品〉も失うことになる。いままでしのぎを削ってきた、作品〈解釈〉の妥当性

も、その当否を判定する基準をどこにも見出しえなくなり、学問としての検証可能性を喪失してしまうことになる。そのため〈文学研究〉も〈文学〉を教育することも不可能であるという絶望的な見解が、研究者の間に蔓延した。

さらに新しい世紀を迎える直前に、「国文学者の自己点検」（坪井秀人「日本文学」二〇〇〇年一月）などが提出され、堰を切ったように〈国文学〉あるいは〈国文学者〉による先の戦争への加担がクローズアップされ、問題化されることとなる。さらに、明治維新以来の近代国家建設に対する日本文学の貢献についての糾弾さえもなされるようになる。もちろん、研究者による自己点検、それ自体は忌むべきことではない。しかしそこにバルト理論の導入による、中途半端な〈テクスト〉論（これを田中実氏は「エセ読みのアナーキー」と呼び、バルトが提示した「真正のアナーキー」と峻別する）の流行が相乗し、近代日本文学研究は、研究者自身の、いわば自虐的ともいえる〈内部告発〉によって崩壊の道を辿ることになるのである。その結果、学問としての自立性を喪失した近代日本文学研究は衰退し、その必然の結果として、ほとんどの研究者が〈カルチュラル・スタディーズ〉へ移行することとなった。

二〇〇〇年代から大流行する〈カルチュラル・スタディーズ〉は、文字通り〈文学作品〉をその時代の文化の様態を測る〈史料〉として扱い、作品の〈解釈〉や〈読み〉は一切問題にしない。ある時代の文化や言説の編成やその変遷を知る術として作品を位置づけ、一人の作家にその時代がどのように受け留められ、またその作品がどのように流布し社会や民衆にどのように受容され、どのような影響を与えたのかといったことが問題化される。こうして、自立性を失った〈文学〉研究を補綴するために、さまざまな隣接諸科学の知見の援用がなされることになるが、その選択は、研究者各自の課題解決のために最も有効な領域からの援用がなされ、問題設定の違いによって脈絡なく種々の援用が行われることになる。そこには隣接諸科学への新たな知見の提供という姿勢はなく、隣接諸科学の成果のおこぼれに群がるハイエナ的な様相を示しているのではないかといえるものも少なくない。もちろん、〈カルチュラル・スタディーズ〉すべてがそのようなものだというわけではない。中には時代の編成と時代の言説の相関を解明した優れた研究成果も見られる。

しかしそのような優れた成果にあっても、それまで〈文学〉あるいは文学作品が湛えていた、人間に対する豊かな洞察や、社会・世界に対する多様な認識の諸相、あるいは一個の人間の直面する苦悩と現実への省察などは、まったく省みられることはなくなってしまう。〈文学〉でしか解

明しえないだろう、こうした諸問題への探求は、むしろ恥ずべきこととして厳しい批判の対象となってしまったのである。もはや〈文学研究〉は、〈文学〉のもつ本質的な意味を問うことも、人文科学としての〈人間〉へのまなざしも失い、学問研究における自らの立脚点を失ったまま迷走しているという状況を呈している。さらに現在の研究状況では、〈カルチュラル・スタディーズ〉のもつ限界性が露になり、研究者の間では、ふたたび文学研究への回帰現象も見られる。

しかし先にも見たように、現時点でも、近代日本文学研究の〈学〉としての自立性を問い直すことはなされていない。さらに、使用する分析概念や学術用語の定義さえもバラバラであり、その内実も研究者によってまちまちであるのが現状である。

〈作品論〉と称しながら、結局〈作品〉の〈意味〉を作者の思想に求めているという古典的な誤謬。表面的には、テクスト論的な立場を取り、作者の影響を否定しながら、作者と語り手を混同し、〈語りの審級〉の区別も曖昧なままの論及。また〈語り〉を実体的なものと捉えて何の疑問も持たないままの分析。〈言語論〉からの考究を装いながら、結局は言語の意味を実体化してしまっている言述。さらにヴィトゲンシュタインの「言語ゲーム論」やソシュールの言語態分析の手法を用いながら、最終的には「言語の不可知性」を楯に独我論に陥り、なんら問題の解決を図れないままで良しとする論考など、研究者が各自の狭い見地に閉じこもり、自説を述べ立てるだけの乱立状況を呈しているとも言えるのではないだろうか。

それは、田中氏が提唱する〈「読むこと」自体を問い直す〉というまなざしの欠如に由来するものであろう。私たちが、「文学作品を〈読む〉ということは、いったいいかなることなのか」という〈原理論〉を放置したままでの、表面的な言語の様相の探求や意味内容の吟味は、実際のところ全く意味を成さない。

「読むこと」そのものを、私たちの認識活動の中でどう位置づけ、どのような意味を担わせるのか。私たちが〈読む〉時に、私たちの意識の中ではどのようなことが行なわれているのか。そこを出発点として、「読むこと」の意味を問い、読書行為の様相を明らかにして初めて、私たちに「読まれた」内容の検討が始まり、分析が可能になるのではないのか。明確な評価基準・分析の足場さえ喪失したままの状況に置かれている現在の近代日本文学研究の領域、さらには日本における〈文学研究〉の領域において、「読むこと」の〈原理論〉構築が求められるのは必然であると考えられるのである。

以上で見てきたような、近代日本文学研究における〈文学（教育）否定〉論とそれに呼応する〈カルチュラル・スタディーズ〉の隆盛は、国語（文学）教育の現場から、作品を丹念に読み、解釈するという活動をも放棄させることになる。教室ではどのような奇怪な〈読み〉も受け入れられる「ナンデモアリ」という混乱が続いて来た。そこでは表面的な語句の意味を追うことに終始し、文章の内容を深く捉えることをせず、自分の理解の範囲の中でしかものを考えないという悪弊が横行する。〈文学〉の、そして〈文学教育〉の場から、作品（テクスト）を精読し、その〈意味〉を考え、自らの課題として自身を問うような姿勢は失われてしまう。

こうした状況を打破し、〈文学（作品）〉を〈読み〉〈学び〉〈教える〉ことの意義を、再び取り戻そうとするのが、田中実氏の第三項論である。それでは次に、第三項論についてみていくことにしよう。

四　第三項（論）とは何か

通常の日常感覚に基づく世界観では、私たちの前にあるコーヒーカップは実在しており、そのカップの姿や触感は「ありのまま」のものであると捉える。しかし、それは私たちの感覚を通して脳の内部に作られたイメージに他ならない。そうだとすれば、私たちは、目の前のコーヒーカップを〈直接〉知覚することは出来ない。

つまり私たち〈主体〉が捉えていると考えていた〈客体〉は、じつは〈客体〉の実像（〈客体そのもの〉）とは異なるものである。それは〈客体そのもの〉が私たち〈主体〉の内部に結んでいる〈客体（そのもの）の影〉なのである。このように、世界を〈主体〉と〈客体〉の二項で捉えるのではなく、〈主体〉と〈客体（そのもの）の影〉と〈客体そのもの〉の三項で捉える。それが第三項論である。

よく誤解されるのだが、第三項論は机上の空論や、作品の〈読み〉を離れた単なる文学理論などではない。私たちが外界や世界を認識する際の根本的な仕組みを考えたものであり、どこまでも私たちの感覚に根ざし、認識という行為の基盤になるものである。もちろんそれは文学作品を読むことにも通ずる。田中氏は次のように述べている。

> 読書主体と客体の文章との相関、メカニズムを考えてみよう。（中略）ポイントは文学の言語は常に誰かに語られ、誰かに読まれていることである。「一般言語表象」の問題ではない。文学の言語でなくても例えば、目の前に一組のコーヒーカップがあるとしよう。確かにある、これは疑えない。しかもこれに美しい思

い出があるとしよう。だが、別の人は別のイメージを持っている。そうすると、今「そこにある」と指したはずのコーヒーカップも自分のイメージしたコーヒーカップでしかない。とすれば、本当のコーヒーカップそのものとはどこにあるのか。自分の捉えているその向こうでなければならない。ではその向こうとは何か。認識の彼方、そこは究極のニヒリズムの場か、〈神〉の隠匿か、それともそれ以外か。ともかくも決定することはできない。言語で捉えること自体を超えている。そこはもはや了解不能の《他者》と呼ぶしかない〈言語以前〉、〈人間以前〉の領域、人間が人間として誕生、生存する以前の物質だけがあって言語のない混沌である。わたしは自分の捉える対象を〈わたしのなかの他者〉、その外部を了解不能の《他者》と呼んできた。捉えられるのは了解不能の《他者》をまえにした時の、その手前、〈わたしのなかの他者〉でしかなく、これを対象化して捉えようとしているのである。（前掲「読むことのモラリティ」pp.108-109）

このように田中氏は、私たちの認識の源泉ではあるが、決して直接的には捉えることのできないものを「了解不能の《他者》」と呼ぶ。これが第三項である。その第三項を、読書と言う行為に当てはめるとどうなるのか。田中氏は、次のようにも述べている。

読み手が客体の文章を文脈（コンテクスト）として捉えた瞬間、客体の文章は**〈わたしのなかの他者〉と化し、〈元の文章〉**はその向こうに**了解不能の〈他者〉**となって、〈わたしのなかの他者〉とは分離する。読み手の捉えるものは永遠に客体そのものには還元されない。無明の闇の中に広がって永遠に見ることはできない。にもかかわらず、〈元の文章〉は確実に読み取った〈わたしのなかの他者〉に〈元の文章〉そのものではないが、一種の**影**として内包され、働いている。筆者はこの了解不可能である〈元の文章〉そのものの領域を**「〈原文〉と言う「第三項」**と呼び、**その影（プレ〈本文〉）**が読み手に現象する〈本文（ほんもん）〉に内包されていると捉えた。〔中略〕見えないもの、聞こえないもの、触れられないものという、いわば了解不能の〈原文〉と言う第三項の領域、この知覚できないが想定するしかない不可知の領域が影（プレ〈本文〉）として、見えるもの、聞こえるもの、触れられるものに内包されている〔下略〕。（「読むことのモラリティ」再論」「国文学」平成一九年五月　pp.92-93　太字は原文のまま。）

第三項を措定しなくしては、我々の〈読書行為〉／〈認

識活動〉は十全に説明できない。むしろ〈還元不可能な複数性〉に飲み込まれ、永久に不可知論／懐疑論の世界の中で彷徨するしかないのである。先に第三項は、机上の空論や作品の〈読み〉を離れた単なる文学理論ではないと述べた所以がここにあるのだ。それでは次に、第三項を措定することと近代の日本語小説を〈読む〉こととの関係についてみていくことにしよう。

五　第三項論のもつ意義

田中実氏は、これまで日本の「近代小説」として位置づけられてきたものを、〈近代の物語〉と定義し直している。そうした〈近代の物語〉に対し、田中氏の言う〈近代小説〉は「物語＋〈語り手の自己表出〉」と定義される。更に田中氏は、「〈近代小説〉は三人称客観描写を雛形にしています。これを達成するためには、〈わたしのなかの他者〉と峻別された了解不能の《他者》、〈向こう〉の領域が要請されています」（「都留最期の日のために――これからの文学研究・文学教育――」「国文学論考」第四八号　二〇一二年三月　p.31）と述べ、単に「自己」以外のものを「他者」とすることを退けている。

それは〈近代的自我〉を実在するものとして捉え、それを描くことが〈リアリズム〉であるとしてきた〈近代の日本文学〉（研究）を相対化する動きでもある。

田中氏のこの定義に従えば、近代小説の誕生は、文学作品の〈創作〉と〈受容〉、すなわち〈作者〉と〈読者〉もしくは〈語り手〉と〈聞き手〉の位相へと直接的に結び付いてくる問題でもある。田中氏は〈近代の物語〉と〈近代小説〉が区別されてこなかった現状について、次のように述べている。

これまでの伝統的物語文学に、〈超越〉という異国の《神》を隠し持った「小説」が侵入し、「日本近代小説」という新しいジャンルが日本に登場します。三人称客観と言う形式に端的に現れる、捉えている客体の〈向こう〉は、了解不能の《他者》に対峙するそれ自体通常人間業を超える形式でした。それを読者共同体のほうは「近代小説」を「近代の物語」と峻別しないまま受容して来ました。客体の文章を自立した客体の出来事と捉え、物語内容を読めばことたりていたのです。（「〈原文〉と〈語り〉再考　村上春樹『神の子どもたちはみな踊る』の深層批評」「国文学　解釈と鑑賞」平成二三年七月　pp.8-9）

さらに田中氏は、そうした「「近代小説」」を〈読む〉行為の本質を次のように説明している。

作中に固有名詞の人物なり、三人称の「彼」なりが登場すると、その「彼」は語られて現れる働きであり、「彼」とは作中の実体＝生身でありながら、〈語り―語られる〉相関の機能として読み手に表れ、「読むこと」それ自体が関係のメカニズムのなかにあり、それが読み手のフィルターを通して一回性として現れるのであり、それが「近代小説」と言う対象「作品」なのです。そうすると、「近代小説」の読書空間は読書主体とその捉えた客体の領域と客体そのものの三項に峻別されます。

人に捉えられた客体は客体そのものではなく、その人のフィルター（感受性や体験）で捉えた、ある種の屈折を通したものですから、客体そのものは永遠に捉えられません。しかし、その客体そのものがなければ自分自身のとらえた客体もないのですから、言わば対象の客体の〈本体〉ではなく、〈影〉にあたるものを我々読者は捉える、これが基本、「読むこと」の出発点です。（前掲「〈原文〉と〈語り〉再考」 p.9）

このような田中氏の理論の背景には、ソシュールによる〈言語論的転回〉を経たポストモダン以降の〈読みのアナーキー〉や、〈還元不可能な複数性〉によってもたらされた〈文学〉の終焉から、いかにして〈文学〉を救い出すのかという切実な問題設定があると言ってよいだろう。いったいいつから〈文学〉を〈読み／語る〉ことが、これほど気恥ずかしく不毛なものと言われるようになったのだろう。そうした自己閉塞的な状況を脱するためにはどうしたらよいのか。田中氏は次のようにも述べている。

近代小説とは極点から折り返し、世界を新たに見せる装置なのです。小説というジャンルは物語と詩からなり、〈語り手の自己表出〉とともにあるのです。〔中略〕物語があって〈語り〉があるのでは全くありません。語りが記憶（物語）を想起させて叙述が行われているのです。そのため、全ての小説の言語空間は〈語り、語られる〉現象としてしか生身の読み手の前にはなく、これが生かされる「読み方」が「読むことの背理」と闘う〈自己倒壊〉であるとわたくしは捉えています。（「「読みの背理」を解く三つの鍵　テクスト、〈原文〉の影・〈自己倒壊〉そして〈語り手の自己表出〉」「国文学　解釈と鑑賞」 平成二〇年七月　p.13）

先に述べたような、近代日本文学研究における問題点は、田中氏の言う「近代小説」と「近代の物語」を区別しないために起こっていた。その実態を田中氏は次のようにまとめている。

「三人称客観」が与えるリアリズムの価値が近代小

説の画期的意義でありながら、同時にこのリアリズムの提出とその超克とを併せ持っていたことが近代小説を小説たらしめていた。近代小説がその誕生の時からポストモダンを抱えた「世界視線の帰属点」をより否定したところで成立していたのである。柄谷（引用者注、柄谷行人）の説く危機や終焉説は根本的な誤謬を含んではいなかったか。（「小説は何故（Ｗｈｙ）に応答する―日本近代文学研究復権の試み―」松澤和宏・田中実編著『これからの文学研究と思想の地平』右文書院　二〇〇七年七月　pp.317-318）

くどいようだが、日本の近代小説の主流は、その存在価値を〈リアリズム〉に置いているが、それは、世界が「ありのまま」に私たちの前に存在し、それを「ありのまま」に描写することが可能であるという実体論に依拠するものである。それは世界を〈主体〉と〈客体〉の二項で捉えることである。研究の領域でも、作家論・作品論は、世界を〈主体〉と〈客体〉の二項で捉えているために、両者の関係性やその真偽が問題になるのである。またテクスト論においては、〈客体〉を否定した後には何も残らなくなってしまう。これらの立場では結局、近代日本文学のもつ大いなる魅力や、作家たちの苦闘の内実を明らかにすることは出来ないだろう。しかし世界を第三項で捉え直したとき、状況は劇的に転回する。実体論やテクスト論の持つ矛盾や限界点を、第三項論は超えてゆくことが出来るのである。

本来は、認識不可能な外界を切り取り描写しなければならないという、矛盾した運命を背負う近代日本文学、およびその研究において、田中氏が言う「〈語り、語られる〉現象」という営為と、それによって作り出される「近代小説」という作品世界を探究してゆくためには、第三項は不可欠なものなのである。

〈付記〉本稿は、近代の日本文学研究の混乱した現状を振り返り、その危機的状況を乗り越えるために、田中実氏の提唱する第三項論の意義を検討したものである。紙幅の関係もあり、第三項論を用いて実際の文学作品を分析することは、別稿に譲ることとする。その第一として、日本文学協会の機関誌「日本文学」二〇一五年三月号に、川端康成の小説「散りぬるを」を、第三項論から分析したものを発表した。本稿の実践編として、あわせてご高覧いただければ幸いである。

（やまなか・まさき、本学教授）